

書字の弱さを持つ子どもへのアプローチ

～医療・療育・学校の連携を考える～

プログラムと抄録

2019年12月8日（日） 東京／新宿 工学院大学

9：30～9：35（5分） 開会の挨拶

9：35～9：40（5分） 事務局から

9：40～11：00（80分） **講演1 眼科医から**

（かわばた眼科院長 眼科医 川端秀仁）

11：00～11：15（15分） ～休憩～

11：15～12：35（80分） **講演2 小児科医から**

（川口市立医療センター副院長 小児科医 下平雅之）

12：35～12：40（5分） 事務局から

12：40～13：40（60分） ～昼休み～ **開場は13：25**

13：40～13：45（5分） 事務局から

13：45～14：30（45分） **講演3 療育機関から**

（視覚発達支援センター 作業療法士 町田大輔）

14：30～14：45（15分） ～休憩～

14：45～16：05（80分） **講演4 学校現場から**

（東京都立矢口特別支援学校主任教諭・公認心理師・特別支援教育士SV 川上康則）

16：05～16：35（30分） **質疑応答、ディスカッション**

16：35～16：40（5分） 閉会の挨拶

「書字の弱さをもつ子どもへのアプローチ」

～医療・療育・学校の連携を考える～

1. 眼科医から

かわばた眼科院長 眼科医 川端秀仁

書字が上手に出来ない場合、まず考えられるのは筆記具の扱いに難点を持つ場合であろう。いわゆる不器用な場合である。しかし、問題はそれだけであろうか？文字を書くには、まず書く字の構造が書字に際して明確にイメージされなければならない。また板書などをする場合には、書き写すべき字が明瞭に見えている必要がある。

視覚機能は、外界の情報を取り入れる入力系（視力、屈折、調節機能、眼球運動、両眼視機能などいわゆる眼科で評価される機能：以下この機能を視機能とする）、入力された情報を処理する視覚情報処理系（＝形態、空間位置関係、動きなどを認識する機能：以下この機能を視知覚認知機能とする）、視覚情報を運動機能（読み、書き、目手の協応など）へ伝える出力系から構成される。また、視覚機能は単独で発達するわけではなく初期感覚である固有受容覚、前庭覚、触覚などの機能からもたらされる情報と統合されながら発達する。板書が上手にできない児を指導する場合、そもそも黒板の文字が明瞭に見えているのか、文字の構造が正しく理解できているのか確かめる必要がある。その上でさらに手先の不器用さが原因で適切に筆記できないのか確認するのである。また、丁寧に書こうとする気持ちがあるか、ゆっくり丁寧に書けば適切にかけるのか、ゆっくり書いても適切に書けないのかなどの確認も必要である。さらに、読み書き障害の児童の主たる原因は文字の視覚情報を音韻変換する機能の弱さが問題であるとされている。発達障害児では原始反射が遷延していたり、発達性協調運動障害が合併していて、いわゆる不器用な子が多い。発達障害児が抱えるさまざまな知覚、運動面での不調が書字の原因となっている可能性がある。

発達障害は小児科で診断されるが、児への支援は関係する保護者、教育・療育・医療機関が連携して取り組む課題である。

本講義では視覚誘導性運動の基本についてお話をするとともにいくつかの症例を交えて視覚機能と学習についてお話しする予定である。

2. 小児科医から

川口市立医療センター副院長 小児科医 下平雅之

読み書きに問題があると、子どもは学校でたくさんの困りごとが生じます。図工や体育が平気でも、国語、算数など文字や図形に関係することが全て厳しくなります。困りごとのレベルは子ども自身の持つレベルで違い、自分が困っていることへの反応も、子どもそれぞれで違いが生じます。さらに、学校内外、家庭などの子どもの周囲環境で、その違いが大きくなります。小児科に受診するタイミングもいろいろです。

小児科では、①まず子どもや家族の背景や、実際の問題点を把握します。②次に一般内科的・神経学的診察をし、子どもの課題や問題点をできるだけ家族に理解、共有してもらいます。③診断のための検査；血液・尿検査、神経生理学的検査（脳波・ABRなど）、画像検査（頭部MRI）、知能検査、読み書きスクリーニング検査、心理検査などを施行し、④診断と対応を進めます。子どもや家族の状況に合わせた配慮が必要になります。

本講義では、困りごとから診断までの流れ、医学的な背景などを、限局性学習症/障害、主に読み書き障害（Dyslexia）についてお話したいと思います。

3. 実際の療育現場から

視覚発達支援センター 作業療法士 町田大輔

視知覚や視機能の発達に様々な発達の相互作用が関連するのと同様に、書字にも手先の弱さの他、手と目の協応や視覚注意力など様々な問題が関与します。また、姿勢保持力も大きく関与し、それを司る体幹もまた大変重要な課題の一つです。単に手先の弱さが基となる書字の苦手さを感じているお子さんには、基本的な手指操作の練習と反復練習で効果が出る事が多く、この児童らにはセラピーの期間もそれほど長くはかかりません。しかし、体幹の弱さ、手と目の協応などの協調運動に苦手さがある場合は、セラピーも眼球運動、手指操作、姿勢保持、運動調整など多岐にわたり、セラピーの期間もそれに合わせ長期化します。重複する発達障害が根底にある場合はさらに、視覚注意（Visual Attention）の問題が関与することが多く、これらには投薬調整にてその苦手さが大きく緩和されることもあります。その場合には小児神経科との連携が重要です。

読み書きの苦手さを多角的に分析し、児童に必要な課題を判断するのはダイナミックビジョントレーニングの一番重要な課題です。今回は、苦手さの要因をそれぞれの障害特性に合わせ、症例を通してご紹介します。

4. 学校の現場から

東京都立矢口特別支援学校主任教諭・公認心理師・特別支援教育士 S V
川上康則

●10年以上経った「特別支援教育」の今

書くことを疎かにしている学校はありません。しかしながら、書くことにつまずきがある子どもの理解はまだほとんど進んでいないのが現状です。

たとえば、小学校低学年の先生方には、「きちんとしつけておかなければ、上の学年になったときに困るから」といった、ある種の無用な使命感のようなものが根強くあります。必然的に、ひらがな・カタカナ・漢字の書字の指導でも細部まで厳しくチェックすることになりがちです。また、中学校の定期テストでは、国語以外の教科でも「漢字で正確に書かなければ正解としない」といったこだわりを崩せない教師がいまだにいます。

小学校の中学年以降「授業中にノートを取らない（取ろうとしない）」という相談が増えます。その背景には、言うまでもなく書字（字を書くこと）のつまずきがあることがほとんどなのですが、それに加えて、「うまく書けない」というつまずきに対する周囲（主に担任教師）の無理解や誤解がもとで繰り返し、必要以上に厳しく指導されてきたという「歴史」をもつケースが少なくありません。こうした傾向は、特別支援教育が制度として始まった平成19年から、ほとんど変化していないように感じています。

●令和の時代には、特別支援教育は「標準装備」になってほしい

「その子を直そう、正そう、変えよう」と一生懸命になると、うまくいかないことが多いです。それだけにとどまらず、自己否定を強くする、支援を受け入れない、暴言・汚言・反抗的な態度が過激化する、つまずきを隠そうとする、授業中の他児妨害や飛び出しが頻出する、登校をしづる、学習性無力感が強くなるなどの二次的なつまずきも助長します。学級の荒れの一因を作り出しているのは、実は、教師の関わりのまずさであると言っても過言ではありません。

関わりのコツをつかむには少なくとも、

- (1) 知識を学ぶこと
- (2) 技術を磨くこと
- (3) 指導の道筋を見抜くこと
- (4) 子どもの実態を的確に捉えること

の4つが必要です。

令和の時代は、特別支援教育があらゆる指導者や支援者の「当たり前の装備」的な位置づけになってほしいと思います。

●子どもの「行動やつまずきの理由」と「対応の具体策」がわかると、関わるのが楽しくなる

「学校現場は多忙」だと言われます。今、その関心は、時間外の勤務をどれだけ短くするかにばかり焦点があてられていますが、問題の本質はそこではありません。どんなに忙しくても、子どものつまずきの背景要因や対応の具体策が見えていれば、おおらかな気持ちになれます。見えていないから、大人も苦しいので早く何とかしたくなってしまいます。その気持ちが、余計な時間と労力を使わせることになっているにもかかわらず・・・です。

学校現場には、今、大きな閉塞感が漂っているように思います。この講演では、それを打開するために、特別支援教育を通して何ができるのかをお伝えしていきたいと思います。

●学級経営と特別支援教育を「両輪」で考えると、指導が深くなる

クラス全体の共感性が育ってくると、特別支援教育は進めやすくなるとうよく言われます。でも、周囲の子にも「先生にもっと見てもらいたい、話を聞いてもらいたい」という気持ちがあります。そんな気持ちを理解しないまま個別的な配慮だけに特化してしまうと、今度は周囲の子たちの「お試し行動」のような不適切なふるまいが続き、クラスが荒れることがあります。学級づくりの中で特別支援教育をどう位置づけたらよいかも、この場で一緒に考えていきたいと思います。